

100の一步

#10 ブルーライン3本目のレール

横浜市営交通の取組とそこに込める思いを発信する“100の一步”。今回は、ブルーラインの3本目のレールについて、電気課電力係の取組をご紹介します。

一般的に、電車といえば、電車の上に張られた電線から電気が供給されているのを想像される方が多いのではないのでしょうか。横浜市営地下鉄グリーンラインはこの方式で走っています。



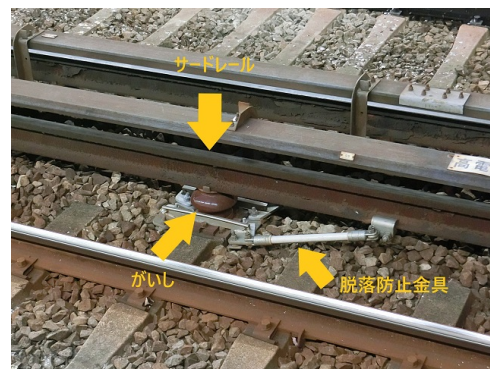
一方、横浜市営地下鉄ブルーラインには、電線がありません。線路の隣にある“サードレール”と呼ばれる3本目のレールから電気が供給されているのです。このサードレールは、“がいし”という焼き物の上に置かれています。

サードレールは標準300m・約15tもあるので、その自重により、日常の列車の走行や軽微な揺れで“がいし”から脱落することはありません。



しかし、東日本大震災の大きな揺れで、一部の区間で“がいし”からサードレールが脱落し、電車に電気を供給できなくなってしまったことがありました。万が一が起きてしまったのです。

この教訓を踏まえ、現在、地震の時に揺れが大きくなる場所に、サードレールの脱落を防止する金具の設置を進めています。



いつ発生するか分からない“もしも”に備えて。
横浜市営交通の安全への挑戦は続きます。



100の一步

#09 お客様のいつもどおりの一日を守る

横浜市営交通の取組とそこに込める思いを発信する“100の一步”。今回はバス営業所での悪天候に備える奮闘をご紹介します。

台風や降雪の天気予報が発表されると、市営バスの営業所はたいへん忙しくなります。

台風の時には、強風でバス停のポールが倒れてしまうことを防ぐため、営業所では、あらかじめバス停を倒し、その旨のお知らせを貼っていきます。営業所により数は異なりますが、数十箇所あるバス停を、手分けしながら倒し、台風が過ぎた後は、また元通りに戻していきます。

また、大雨で排水溝が詰まり、道路冠水してしまったときには、営業所の係員が排水溝の詰まりをかき出す作業を行って、バスが運行できるようにしています。

今年も雪の季節が到来しました。降雪した時には、バスが運行できるよう、道路やバスターミナルに融雪剤を撒いたり、スコップで雪かきをするなど、早朝深夜を問わず行います。

翌日、雪が降るのかがはっきりしないこともありますが、そういうときは積雪を想定し、前夜にタイヤチェーンを装着します。そして翌朝、積雪がなかったときには外します。一見無駄な作業のようですが、チェーン装着には時間がかかる一方で、チェーンを外す作業は短時間で済みますので、確実な運行のためにはチェーンを装着して備えておくほうが良いのです。

営業所の係員は、とりわけ悪天候時には、裏方として様々な備えや対応のために奮闘します。すべては、バスの“普段どおり”の運行の確保と、お客様に“いつもどおりの一日”を送っていただくために…



100の一步



#08 地下鉄運転士の一日の始まり

横浜市営交通の取組とそこに込める思いを発信する“100の一步”。今回は地下鉄運転士の業務をご紹介します。

始発前、運転士が乗務員室で点検をしている姿を見たことがありますか？
地下鉄を安全に運行するために、地下鉄運転士は、営業前すべての電車の点検を行っています。

これは「出区点検」と言い、客室の電気が全て点いているか、お客様への案内で使用するマイクが動作し音量が適切か、ドアは全て正常に開閉するか、ブレーキが正常に動作するか、電車が前後に動くかなど約100項目をそれぞれ前方・後方の乗務員室で確認し、全てを20分以内に終了させます。

「出区点検」は異常・故障をいち早く発見し、電車を正常に運行させるために行っています。

運転士一丸となり、100年先もお客様に安心して横浜市営地下鉄をご利用頂けるように日々、確実に確認して運転していきます。



100の一步

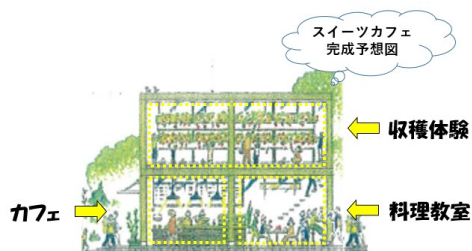
#07 高架下にいちご栽培のハウス出現！？

横浜市営交通の取組とそこに込める思いを発信する“100の一步”。今回は高架下を活用した地域との連携についてご紹介します。



交通局では、駅や駅周辺の資産を有効活用して、これまでにカフェ、コンビニなど112の店舗等を整備しています。開発にあたっては、駅をご利用いただくお客様に便利になったと実感していただくとともに、それぞれの沿線地域が思い描く街づくりにも思いを寄せて、その地域にふさわしいお店は何かを考え活用を進めています。

私たちが街づくりについて特に意識をするひとつがセンター南・北駅の活用です。両駅の間には大規模な商業施設に囲まれた自然豊かな“みなきたウォーク”という遊歩道があります。この遊歩道と並走するブルーライン・グリーンラインの高架下の活用は、地元の方々とともに作り上げた街づくりの基本構想に基づき進めており、ここには賑わいの創出に合わせ、活動・交流の促進、子育て・教育支援などの地域の思いが込められています。



今回紹介するいちごのハウスについても、実際にここで収穫を体験できることで交流が生まれ、子供たちが食について学んでほしいという思いがオーナー横澤さんにはあります。オーナー自ら苗の植え付けから土壌の管理、そして人工ではなくクロマルハナバチによる受粉まで愛情込めて育てています。年明けには酸味と甘みの絶妙にバランスの取れた“紅ほっぺ”がお目見えし、収穫も楽しめます。

そして、将来的にはいちごを使ったスイーツづくりやカフェの開業を目標としています。

これからも交通局が沿線の街とともに歩いていくためには、街に生活する

人々の暮らしを見つめ、地域と協力しながら活気ある街づくりの実現に努めてまいります。資産活用も地域とともに取り組んでいきたいと思ます。。

100の一步

#06 お客様を守る小さなボタン

横浜市営交通の取組とそこに込める思いを発信する“100の一步”。今回は電気区信号通信掛の業務をご紹介します。

電気区信号通信掛では、地下鉄を安全に運行させるのに必要な信号設備の点検や、お客様への情報提供に欠かせない放送設備など、様々な設備を点検しています。

点検している装置は、信号設備だけで20種類、通信設備は26種類あり、これらの装置一つひとつについて、多岐にわたる点検項目ごとに、1か月から2年の周期で丹念に点検を行っています。

設備の中には、地下鉄の線路を切り替える「電気転てつ機」や地下鉄をダイヤ通り運行させる「運行管理システム」など、大きな設備もありますが、小さくても重要な設備もあります。

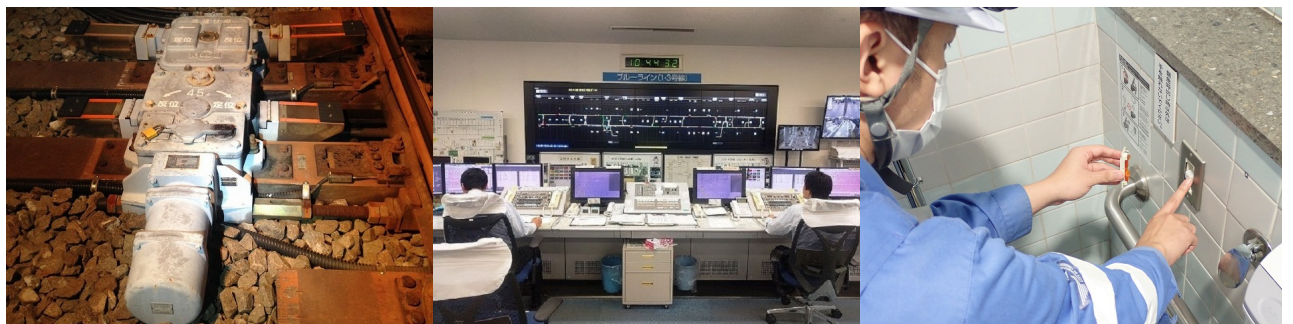
その一つが、トイレの個室に取り付けている『非常ボタン』です。

小さなボタンですが、お客様の急な体調不良で倒れそうになった時やトラブルが発生した際に、駅係員や周りの方にそのことを知らせることができます。

もし『非常ボタン』が壊れていたら、緊急事態が発生しているにも関わらず、初動対応が遅れてしまい、お客様をお守りすることが出来ません。

小さなものでも、お客様のために。

設備の大きさに関わらず、その先にどんな危険があるかを常に意識しながら、安全を確保するために、一つひとつ、しっかりと点検しています。



100の一步

#05 地域の皆さんとつくるイルミネーションバス

横浜市営交通の取組とそこに込める思いを発信する“100の一步”。今回はイルミネーションバスについてご紹介します。

若葉台営業所（横浜市旭区）では、近隣の横浜わかば学園の生徒の皆さんにクリスマスバスの飾り付けをしていただきました。こちらの生徒さんは営業所内やバス車内の清掃等のお手伝いをしてくださっており（※感染症予防のため現在は休止中）、営業所とは普段から交流があります。

生徒さんはクリスマスをテーマにして描いた作品の展示や、モール、ツリー、オーナメントなど思い思いの装飾をし、職員が主に電飾を担当し、互いに協力し合って華やかなバスに仕上がりました。

そして、飾り付けの作業後には、生徒さんが手慣れた様子できびきびと手際よく、バス車内をピカピカに清掃してくれました。

生徒さんがはつらつと作業をしている姿に、営業所の職員は元気をもらいました。イルミネーションバスは、若葉台営業所では一台、運行しました。

他の営業所でもそれぞれに工夫を凝らしたイルミネーションバスを運行。詳しくはこちらをご覧ください。

<https://www.city.yokohama.lg.jp/city-info/koho-kocho/press/koutuu/2020/1130Illuminationbus.html>

新型コロナウイルス感染症の状況を踏まえ、自粛することも考えましたが、規模は縮小してでも実施することとしました。それは、地域の皆さんがイルミネーションバスを楽しみにしてくださっているのはもちろん、生徒さんにとっても、バスを一つの作品として仕上げることを、貴重な地域貢献の機会として取り組んでくださっているからです。

※横浜市営バスでは、定期的な消毒・窓開けをして運行しています。





100の一步

#04 100周年カウントダウン

横浜市営交通の取組とそこに込める思いを発信する“100の一步”。
今回は、横浜市営地下鉄関内駅の取組についてご紹介します。

2021年4月1日に市営交通は100周年を迎えます。

関内駅では、お客様と一緒に100周年を迎えたいとの思いから、駅職員全員で考え、「市営交通100周年カウントダウン」「横濱と市営交通の歩み」を展示することにしました。

関内駅周辺の歴史や市営交通の歩みをお客様と共に振り返りながら、幅広い年代のお客様にそれぞれの思い出を懐かしんで頂くことをコンセプトに制作しました。

「市営交通100周年カウントダウン」は、4月1日までの日数を示しています。関内駅をモチーフとして、ランドマークである横浜スタジアムを中心に周辺施設や路面電車、連節バス、地下鉄車両を周りに装飾しました。約半年間使えるように、強度を保つための折り曲げによる工作を多用したほか、LEDの電飾で華やかにするなど、随所に工夫を凝らしています。

「横濱と市営交通の歩み」では、横浜市電保存館にもご協力いただき、明治後期から現代までの出来事や記録写真を展示しました。3部構成を計画しており、次回は昭和20年から昭和60年頃、最終回は昭和60年頃から令和2年までの写真を展示する予定です。

ささやかですが、いずれも100年にわたり支えてくださったお客様への感謝の気持ちを込めてみんなで作りました。手作りのあたたかみも一緒に味わっていただけたらと思います。是非、ご覧ください！



100の一步

#03 1円玉の秘密

横浜市営交通の取組とそこに込める思いを発信する“100の一步”。
今回は、地下鉄グリーンラインの秘密についてご紹介します。

グリーンラインの大きな特徴の一つ、それはリニアモーターで推進していることです。

一般的な地下鉄は、円柱型のモーターの回転を、歯車を介して車輪に伝えて前に進んでいるのに対し、グリーンラインのリニアモーター車両は、車輪自体に直接回転力を作用させずに、リニアモーターに電流を流し、レール間に敷かれた鉄板（リアクションプレート）との磁石の吸引力・反発力により進みます。こうした方式で走る『リニアメトロ』は全国で7路線あり、グリーンラインもその一つです。

リニアモーターとリアクションプレートの隙間は、最大で1円玉の直径、最小でスマートフォンの厚み程度に調整しなければなりません。隙間が広すぎればモーターの効率が落ちますし、狭すぎればリアクションプレートとぶつかってしまうためです。17編成・68両あるグリーンラインについて、一つひとつ丁寧に調整器具で高さを測定し、基準値外の場合には、工具を使用し高さを調整していきます。

こうして整えられている1円玉大の隙間。

この僅かな隙間を保ちながら、重量100トンの列車が最大時速80kmで疾走するのです。



100の一步

#02 二人乗りベビーカー

横浜市営バスでは、令和2年11月1日より、二人乗りベビーカーにお子様を乗せたままご乗車いただける取扱いを開始しました。

“車椅子スペース”を使い、座席を跳ね上げ、ベビーカーと車体をベルトで固定して乗車いただきます。

従来のベビーカー固定ベルトでは、二人乗りベビーカーを固定するには長さが足りません。そこで、十分な長さのあるベルトに更新しました。

全800台以上ある市営バス車両は、安全のため、1か月に一度必ず点検をします。それにあわせてベルトを更新したほか、既に点検がおわっていた車両にも営業所の職員総出の手作業で一つひとつ取り付け、ようやく11月1日を迎えました。

二人乗りベビーカーをお使いの方からは、かねてよりご要望があり、昨年度、交通局でも実験をしていました。

大型のバスには車椅子スペースが2台分ありますが、車椅子と二人乗りベビーカーの両方が乗車されたときに、互いにすれ違うことができないなどの難しさがあり、場面に応じて乗務員が臨機応変に対応する必要があります。

平成16年、全国で初めてベビーカー（一人乗り）にお子様を乗せたままバスにご乗車できるようにしたのは横浜市営バスでした。

これからも、どなたにもご利用いただきやすいバスを目指してまいります。

最後にお願ひです。二人乗りベビーカーでの乗車にあたっては、座席におかけの方や付近にお立ちの方に移動をお願いするなど、お客様のご協力が不可欠です。

皆様のご協力を、どうぞよろしくお願いいたします。



100の一步



#01 指先に込める思い

ホームで駅員が指差確認をしているのを見たことがありますか？

一見、何気ない動作に見えるこの「指差確認」には、一つひとつ意味があります。線路に障害物がないか、電車の行先が正しいか、前照灯や尾灯の点灯状態、ドアが完全に開扉・閉扉したか確認しています。流れ作業にせず、指差確認動作をキビキビと行うこと、確実な指差確認で異常を見逃すまいとの思いを込めて一本一本電車を送りだしています。

また、ホームでの業務で心がけていることは、ご乗車されるお客様が多い時間帯では空いているドアへの分散乗車を呼びかけ、出張や旅行で利用されるお客様の割合が増えたと感じたときは、新横浜駅で新幹線の乗り換えに便利な乗車位置を電車到着の間合いにご案内するなど、状況を見て放送にも気を配っています。お客様に安心してご乗車していただきたいという気持ちと、快適にご利用いただきたいという気持ちを込めて、これまでも・これからも業務していきます。